

ハーバードで考える 東京の極小・都市論

マイクロ・アーバニズム



会田友朗

大学を卒業しNYからボストンへ引っ越した10日後の2001年9月11日は、ハーバード大学デザイン大学院(GSD)建築学修士課程の入学式だった。式が中断され廊下へ出ると、テレビが2棟の高層ビルが崩壊する光景を映していた。異様な緊張感のなかで始まる学期。鮮やかな紅葉に彩られた秋のキャンパスで、航空機の飛行が禁じられ、高く澄んだ空の静けさが際立っていた。

ハーバード流・都市論と社会批評的建築教育

GSDは、建築、都市デザイン、ランドスケープデザインが中心のプログラムで、伝統的に「都市」への関心が深く、当時は、都市デザインへの造詣の深いピーター・ロウが学部長を務めていた。また、建築理論家のK・マイケル・ヘイズやその教え子たちによる社会批評的な建築観も特徴的で、選択科目の「建築理論」の講義では、ベンヤミン、ジンメルやフロイト等、毎週膨大な量の理論書を読まされた。当時の自分の英語力でレポートに何を書けばよいか苦悶した記憶しかない。その理論分野の若手として目立っていたサラ・ホワイティングが今ではGSDの学部長という。教育方針がとても興味深い。

2002年秋学期の設計スタジオでは、ブエノスアイレスの敷地をスタジオ全員で現地調査し提案した(旅費は大学や財団や協賛企業から支給)。建築家のホルヘ・シルベッティとアーバンデザイナーのルドルフ・マチャドによる「アルゼンチン国立文書館」の課題で、建築と都市デザインの2つのスタジオが合同でひとつのプロジェクトを提案するという、極めて分野横断的な出題で印象に残っている。

東京マイクロ・アーバニズム

そのスタジオでパートナーを組んだ、アーバンデザイン専攻のグレンとAsiaGSDというアジア系学生団体の共同代表に立候補し、就任した。文化的な背景が多様なハーバードらしく、中東GSDやラテンGSDなど多くの学生団体があつたが、なかでもAsiaGSDは当時最も活発に活動していた。毎年1度、海外から専門家や研究者を独自に招聘し、GSDの教授陣も交える大規模なシンポジウムが代名詞だった。前年度のテーマは上海の都市成長戦略を扱っていた。僕とグレンは、東京をテーマに「マイクロ・

アーバニズム」と称し、巨大開発とは異なる極小の都市論をあえて扱うこととした。同じ年に中東GSDがドバイのメガ開発をテーマにしていたことも対照的だった。

まずは資金集め。アメリカの財団や日本企業に企画書を送り、開催に必要な助成を獲得、夏休みに日本に一時帰国をして、東京での都市的な実践で活躍する建築家に企画を直接説明してまわり、参加の承諾をいただいた。キーノートスピーチは青木淳氏にお願いした。

当日、象徴的だったのはアトリエ・ワンと理論家サンフォード・クインターのセッションである。「メイド・イン・トーキョー」や小規模だが都市的な実践の紹介と、サンフォードによる茶道の美学と日本的都市の関係性への言及など、パネルディスカッションは盛り上がり、最後、サンフォードは半ば冗談まじりにOMAを参照しつつ「BIGNESSはもう古くて、これからはsmallnessが来るね」と言った。シンポジウムからちょうど20年。リノベーションまちづくりやコミュニティデザインの勃興など、スケールを問わない都市的な実践はむしろ当たり前の光景とも言え、時の流れを感じる。

印象的だったのは、当時建築学科長を務めていたトシコ・モリの閉会の辞だ。半ば日本的マイクロ・アーバニズムが楽観的に語られていた会の雰囲気(企画者である僕の責任だと思う)に釘を刺すように、「東京という都市は、2度徹底的に破壊された。関東大震災であり、第二次世界大戦における東京大空襲で。今の都市東京があるのはどん底からの復興があつたことを私たちは決して忘れてはならない」とお話をされた。

今日、地震や洪水など大規模な災害や、人為的な戦争により都市が破壊される映像を目撃する日常のなか、あらためて建築家やアーバンデザイナーの仕事やその役割について考えさせられる、身の引き締まる一言だ。



カンファレンス全体写真



案内ハガキ(裏面)